

2019年度総括シンポジウム&ミニマルシェ

農業を支える水利の力



「水利が拓く実りの明日へ」キャンペーン



パネルディスカッション

未来へつなぐ農業と土地改良

～生産・土地改良の現場から～

- 出演者..... 岩坂 省三さん (栄北部株式会社 代表取締役社長) 高塚 俊郎さん (タカツカ農園代表) 池田 広之さん (JA佐渡水稲部会長) 佐藤 毅さん (北陸農政局新潟県拠点・総括農政推進官)
- コーディネーター..... 伊藤 忠雄さん (新潟大学名誉教授)



排水機場は地域の命綱

栄北部株式会社代表取締役社長 岩坂省三さん



旧栄村(現三条市)で1982年に設備共同化のため稲作組合を立ち上げ、その後大豆転作を合理化するため株式会社を設立しました。コムと大豆を順番で作付けするブロックローテーションによる大規模団地化を進めています。これは土地改良事業では現場条件がよくなったおかげです。

私が小学生の頃は水害が多く、収穫がほとんどない年もありました。しかし刈谷田川右岸排水機場が稼働したことで排水環境は大きく改善されました。2004年の7・13水害でも農作物の被害を免れるなど、排水機場は地域の命綱でもあります。

一方、後継者問題が大きな課題となっています。今後は地域全体でこの問題を話し合っていく必要があります。

省力化で活動の場拡大

タカツカ農園代表 高塚俊郎さん



コムと柿、食品加工が経営の3本柱です。最も広い田んぼは1枚約3畝弱、給排水口が5つあり、調整は1カ所で済みます。漏水がないので見回りが極端に省力化でき、地下水位も調節できます。就農以来、面積は3倍以上になりましたが管理にかける時間は減っています。その時間を活用し、NPO法人として子ども向けの農業体験や食育を行うほか、地域の祭りにも参加しています。

東京からUターンし、就農する際、「なぜ農業をやりたいのか」を考えた。結論は「子どもたちに食の記憶を残したい」という思いからでした。効率よくお金を稼ぐなら東京が一番ですが、農業や食の多様性は非効率さから深まると考えています。また、そこに新潟の良さも詰まっていると思います。

豊かな自然生かす こだわりの酒造り

新潟は酒造りの三大要素である「コム」「水」「人」に恵まれています。



パラエティに富んだ五つの蔵元がある佐渡でいえば江戸時代、金銀山で働く人々の食料を賄うため、コムが多く作られました。島内の軟水は柔らかい味味の酒を生み、粘り強い県民性は酒造りに適しています。トキが舞う豊かな自然を加えた「四宝和醸(しほうわじょう)」が当社のモットーです。

例えば、環境に配慮して栽培されたコムを使い、佐渡ならではの酒造りに取り組んでいます。契約農家、相田忠明さんの「力キ農法」で育て

認証米栽培 トキと共生

JA佐渡水稲部会長 池田広之さん



私が農業の後継者となった当時「一番水」という制度がありました。ベテランの農家が田んぼを回り一定時間、配水する仕組みです。小倉ダムが完成し、各地域で給水が始まったことでこの制度はなくなりませんでした。

佐渡のコシヒカリは、減農薬減化学肥料が基本であり、トキをはじめとする生き物と共生する農法です。佐渡市の

園芸の振興へ基盤整備

北陸農政局新潟県拠点 総括農政推進官 佐藤毅さん



コムに偏る新潟県の農業算出額(2018年)は、山形県に抜かれ、13位と順位を下げました。園芸の振興が本県の課題であり、水田でも園芸作物を栽培できるよう、排水改善などに取り組むことが土地改良事業の今後の役割です。

また、農家の高齢化が進み、担い手不足が顕著です。省力化の問題解決の鍵となるのが自動走行トラクターやドロー

古里の実り次世代へ 十分な議論が不可欠

コーディネーター 新潟大学名誉教授 伊藤忠雄さん



土地改良事業によって本県農業は構造改革が図られ、経営の大型化が進んでいます。組織が連携し、もたらす農業に取組む岩坂さんのような形態は、今後の農業にとって重要な方向性を示しています。

また、作業の省力化は、時間を生み、特色ある農業を可能にしました。佐渡では、トキをはじめとする生き物と共生するコム作りを力を入れ、日本初の「世界農業遺産」に認定されました。地域独自のブランドはまさに財産です。他産業と交流する高塚さんの活動は新鮮であり、地域の共感を呼びました。

参加者の声

●不便とは思っていませんが、佐渡でこんなにもたくさんの挑戦がされているとは驚きました。尾畑さんの話に感動。40代女性●若い人たちが農業に目を向け、農業だけで生活が成り立つような取り組みの強化が必要ですね。若い人に夢を与えられるようPRしていただきたい(50代女性)●農家だけでなく消費者と一緒に農業を支えなくてはなりません。土地改良の技術という視点があつたので、勉強になりました(50代女性)●初めて参加しましたが大変勉強になりました。今後ぜひ続けてください。(70代男性)



佐渡ならではの稲米

「水利が拓く実りの明日へ」キャンペーン事務局

ミニマルシェ

日報ホール入りのホワイエではミニマルシェが開催されました。紙面に登場した生産者が農産物や加工品を販売し、「水利の恵み」を求める来場者でにぎわいました。

タカツカ農園(新潟市秋葉区)のブースには、ジャムや干し柿、ドレッシングなどの加工品がずらり。JA佐渡(佐渡市)はリンゴやコム、ドライフルーツなどを取りそろえました。

吉田章さん(三条市)がハウス栽培するのわさび菜。来場者に「サラダやおひたしにして食べて」となどアドバースしていました。

水利の恵みも味わって 県内3地区の農産物 おしゃれにアレンジ

①取材時のエピソードを披露した木原四郎さん ②県内3地区の農産物を使った創作料理

プロフィール

1944年、新潟市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は農業経営学。同大教授、副学長などを経て2010年に退職。15年3月まで放送大学新潟学習センター所長。12年から5年間、県内の先進的農業経営者を講師に招き、実践的経営塾を主催する「新潟農業経営塾」を主宰。現在、新潟市農業活性化研究センター名誉所長として新潟農業の課題などを問題提起している。

コメ偏重から転換を 新たな胎動に期待感

新潟大学名誉教授 伊藤忠雄さん

「コメ王国新潟」は、農業水利大國でもある。とりわけ、用排水機場の設置数は300カ所。新潟県が全国一となっている。その数の分だけ、新潟では水との苦闘が多かったことを物語っている。

本年度の水利が拓く実りの明日へ「キャンペーン」では、大規模な三つの用排水施設を巡った。施設の造成が受益地域に及ぼした効果は大きく、それらの先進的な取り組みは総括シンポジウムで生産者から紹介された。

しかしながら、その一方で、県内各地では米価の長期低迷や高齢化、後継者不在などの事情から大規模用排水施設が拡大している。その背景として、コメ偏重の農業構造の問題はなかつたのか、検証が必要ではなからうか。「コメ王国」は今、大きな転換期を迎えているように思われる。

そうした折、先日、秋田市で秋田県主催の「あきた型ほ場整備」構想と実践」発表会が開催されたので、聴講した。ほ場整備の新規採択を希望する地区の代表者ら12人が、事業完了後の営農構想と実践報告を1日ばかりで語った。会場の県庁講堂は農業者など約250人の聴衆でぎっしり。熱い発表に身を乗り出して聴き入っていた。

地域で議論を積み上げてきた営農構想は、どの事例も野菜など高収益作物の大幅導入による所得拡大策が盛り込まれていた。さらには担い手の高齢化に備えてICT(情報通信技術)の積極導入を目指す地区や、近隣の法人間の連携で努力調整を図る計画など、意欲的な内容であった。この分だと新潟県は農業産出額で抜かれた山形県に続いて、今度秋田県にも野菜産出額で追い抜かれるのではないかとこの予感がした。「先を見据えた対応を」「若い人の模範となる営農を」など、発表者の言葉に深い感銘を受けた。

時代の変化を先取りした地域の胎動が始まっている。豊穡の大地を次代へ引き継ぐ土地改良に、新たな期待が高まっている。